

## 優秀賞

住宅の部

建築主：根本 成光  
設計：株式会社 ゆま空間設計  
施工：丸西建材 有限会社  
所在地：香取郡多古町

山と民家の手入れは不可分

# 菅澤武兵衛邸



南側外観。玄関は正面に小さく設え、日常出入は別の勝手口。腰板、下見板は山の木。

屋敷と田畑と杉林をセットで相続した方からの依頼で、築百数十年の民家を改修したものである。多古町の谷戸を縁取るように点在する民家のひとつで、杉の大木が生い茂る山を背にして建っている。先代は林業を営んでいたといい、本来は良質の杉林だったが、放置されて久しかった。代替わりして、屋敷ほかを引き受けた方は、そもそもここに住んでいなかった。

家を改修するにあたり、「自前の杉を使うこと」が条件だった。まず、杉を伐採し製材し乾燥して建材として使えるようにする。結局、二年以上の歳月を費やした。また、元の建物をなるべくそのまま活かしている。部分的でも使える材は残し、腐食した部分のみを挿げ替えるなどして、ていねいに改修されている。接客や親族の集まるときに使われてきた続き間の和室および座敷にはほとんど手をつけていない。現代の生活スタイルに合うように改修する部分は、土間およびその奥に続く台所と食堂で、日常的に使う空間に限定している。

家主は、裏山の木を伐採するところから始めて、このような仕事を引き受けてくれる設計者を探すのに苦労したという。ようやく改修工事が終わって、都市部にある自宅に住みながら、週に3日程度、もっぱらこの家の管理のために、一人で滞在している。

古民家をお洒落な宿やカフェなどにリノベして、稼げる観光資源として活用する古民家再生がブームとなっているが、菅澤邸の家主は、世代を超えて山といっしょに屋敷を継承していく役目を定めとして引き受け、誰の気を引くためでもなく、膨大な労力を注いでひっそりと、山とともに民家を手入れしようとしているのだ。これこそが、古民家との本来の付き合い方ではないだろうか。（岡部 明子）



南東角15帖、10帖、8帖の和室  
壁に漆喰、木部磨きで蘇る



元土間をLDKに改修  
中2階を取り払い吹き抜けに改修